

[論説] 1596 年豊後地震における沖ノ浜の津波高7ブラサの検証

四国電力株式会社* 松崎 伸一

郷土史研究家† 日名子 健二

日出町歴史資料館・日出町帆足萬里記念館‡ 平井 義人

A Verification Relevant to Tsunami Height 7 Braças at Okinohama in the 1596 Bungo Earthquake

Shinichi MATSUSAKI

Shikoku Electric Power Co., Inc., 2-5 Marunouchi, Takamatsu, Kagawa, 760-8573 Japan

Kenji HINAGO

Local History Researcher, 843-1 Seike, Oita, 870-0012 Japan

Yoshito HIRAI

Hiji Town Historical Museum and Hoashi-Banri Memorial Museum, 2602-2 Hiji, Hayami, Oita, 879-1506 Japan

In the 1596 Bungo Earthquake, Portuguese missionary Luís Fróis wrote down that the tsunami height at Okinohama(Oqinofama), a trading port in the Oita city of Middle Ages, was 7 braças. Braça is an old Portuguese unit of length, and generally thought that 1 braça is equal to 2.2 m. If so, it becomes the tsunami height at Okinohama was around 15 m. However, according to preceding studies, tsunami height around Beppu bay is regarded as around 4 or 6 m. We verified the length of braça based on the description that Fróis et al. had written down in those days. As a result, we conclude that Fróis was regarded 1 braça as around 1 m. Therefore we think that Fróis recognized tsunami height at Okinohama as 7 m. But we will not insist that tsunami height at Okinohama was 7 m. Because the current knowledge that tsunami height at Okinohama and Funai, metropolis of Middle Ages Bungo near Okinohama, were from 4 m to 5 m is more reliable. Our conclusion does not greatly contradict this knowledge. At least, the height of 15 m will be denied.

Keywords: 1596 Bungo earthquake, tsunami height, Okinohama(Oqinofama), braça.

§ 1. はじめに

ポルトガル船が種子島に漂着し鉄砲を日本に伝えたときとされるのは、天文十二年(1543 年)のことである(1542 年とする説もある)。その2年後には別府湾にもポルトガル人を乗せた中国船が姿を現し、府内(図1)に近い港に入港した。その港は、大友義鎮(宗麟)時代に南蛮貿易港として栄えた沖ノ浜(図1)だったと考えられている。しかし、中世の史料にしばしば登場する沖ノ浜は、「1596 年 9 月 4 日、別府湾で発生した大地震と大津波で…中略…海底に没した」[加藤(1996)]。

沖ノ浜は大分川の河口付近に存在した港であり、1596 年豊後地震の際、液状化等の被害を受けて海中に没したと考えられている[例えば三澤・他(1992), (株)大分放送大分歴史事典刊行本部(1990)]。その津波被害の様態を記録した同時代史料が存在する。布教のために来日したイエズス会宣教師がヨーロッパに向けて発信した書簡のひとつ、『1596 年日本年報補遺』である。ここには以下のような記述がある。

[史料 1]

「豊後で起こった地震は非常に大きくて恐るべきも

* 〒760-8573 香川県高松市丸の内 2-5

電子メール: matsuzaki12987@yonden.co.jp

† 〒870-0012 大分県大分市大字勢家 843 番地の 1

‡ 〒879-1506 大分県速見郡日出町 2602-2

のであり、もしキリシタンたちがそこから来て話さなかったなら(事実とは)信じられぬほどのものであった。我らは非常に立派で、豊後のキリシタンの中ではもっとも古いブラサ(という教名の信徒)の来訪を待っていたが、彼はやっと非常な危険を免れてここへ来た。彼はこう言った。「私は今でも[その時は地震から2か月が経っていたが]十分に平静さを取り戻していません。また故郷が崩壊しているのを見て生じた恐怖を払い除けることもできません」と。

府内に近く三千(歩)離れたところに、沖の浜と言われ多数の船の停泊港である大きな集落、または村落があり、この地に因んで沖の浜のブラサと呼ばれているこの善良な男は、他の諸国から集まってくる種々の人々に自分の家を宿泊所として提供していることから、豊後では非常に有名である。

彼は(地震のことを)こう言った。或る夜突然何ら風にあおられぬのに、その地へ波が二度三度と(押し寄せ)、非常なざわめきと轟音をもって岸辺を洗い、町よりも7ブラサ以上の高さで(波が)打ち寄せた。このことはその後、或る非常に丈の高い古木の頂上によって知られたことである。そこで同じ勢いで打ち寄せた津波は、およそ千五百(歩)以上も陸地に浸水し、また引き返す津波はすべてを沖の浜の町とともに呑み込んでしまった。」[松田(1987)によるラテン語版からの邦訳]

ここには、津波の高さが7ブラサ以上だったと記されている。『現代ポルトガル語辞典』[池上・他(2005)]によれば、1ブラサは「昔の長さの単位(=2.2 m)」と記されており、単純に換算すると津波高は15.4 mとなる。従来、沖ノ浜やその近傍の府内の津波高は約4~5 m[平井(2013)]とされており、15.4 mという値はこれらと大きく異なる。さらに、別府湾沿岸における津波高も、別府が約4~5 m[平井(2013)]、佐賀関が約6 m[松崎・他(2015)]などとされており(図2)、沖ノ浜だけが突出する状況は、にわかには信じ難いものがある。そこで筆者らは、この7ブラサに着目してその真偽を検証することとした。

§2. イエズス会書簡と『1596年日本年報補遺』

まず、豊後地震津波の様態を書き留めるイエズス会宣教師の書簡について整理したい。

イエズス会の初代総長イグナティウス・デ・ロヨラは、会の組織を固め、統一を守り、指導を徹底させるために通信(報告)の制度を定めた。そして、中世日本に

来訪したイエズス会宣教師達は、ヨーロッパの本部等に宛てて多くの書簡を送った。豊後地震津波の様態を記す『1596年日本年報補遺』も、そのイエズス会書簡のひとつである。

2.1 日本発信のイエズス会書簡の歴史

2.1.1 フランシスコ・ザビエルの来日

スペイン人宣教師フランシスコ・ザビエルが日本布教の目的のために鹿児島に到着したのは、天文十八年七月二十二日(ユリウス暦1549年8月15日)のことである。そしてザビエル一行が到着してから2か月半後、鹿児島港からマラッカに向けての船が出港した。ザビエルはこの船にインド(ゴア)のイエズス会士などに宛てた5通の書簡を託した。イエズス会における日本発信の書簡はここに始まる。一般的にはこれら初期の書簡は日本通信と呼ばれている[例えば村上(1927)]。

イエズス会の会憲によれば、個々の地方長は4か月ごとに報告をローマの総長に送らねばならなかったが、1565年に報告は1年に1度以上と定められた。また、日本において、原本、写本、他言語への翻訳版の合計3通が作成され、別々の船に託されてマカオやマラッカ、ゴアを経由してヨーロッパへ送られた。

2.1.2 ヴァリニャーノによる制度化

しかし、初期にインドを経てヨーロッパ各地に送付されたイエズス会書簡には、不統一、誇張、美化といった欠陥が伴ったことから、1579年に巡察師(布教状況の査察官)という資格で日本に派遣されたヴァリニャーノが制度化を図った。統一された形式の年報が、日本布教長の責任において年度末にまとめられて報告されることとなったのである。これらは一般的には日本年報と呼ばれる[例えば村上(1943)]。日本年報は日本でポルトガル語版、スペイン語版、イタリア語版が作成された後、ヨーロッパに向けて送られた。日本年報の制度は1579年に始まったが、1582年から1597年の間、日本年報の執筆を担当したのが、ルイス・フロイスである。津波被害を語る『1596年日本年報補遺』を執筆したのも、このフロイスである。

2.2 ルイス・フロイス

フロイスは、1532年リスボン生まれのポルトガル人司祭である。16歳の時にイエズス会に入会し、その1~2か月後、インドに向かった。そして日本で布教活動を行うため、永禄六年六月十六日(ユリウス暦1563

年7月6日), 31歳の時に大村領横瀬浦(長崎県西海市西海町横瀬郷)に上陸した。

その後約1年間は平戸の度島を中心に活動した後, 五畿内派遣の命を受け永禄七年十月七日(ユリウス暦1564年11月10日)に平戸をたち, アルメイダ修道士(1525年リスボン生まれのポルトガル人)とともに沖ノ浜から乗船し伊予に向かったが, 時期的に風向きが悪く, 風待ちのため府内にとどまること1か月。結局沖ノ浜から出港できたのは, 永禄七年十一月二十九日(ユリウス暦1565年1月1日)のことであった。

五畿内で約11年半の間, 布教活動を行った後, 兵庫から乗船し, 天正四年十二月三十日(ユリウス暦1577年1月18日)に豊後に戻った(沖ノ浜に帰着した)。その後しばらく豊後の臼杵を拠点として活動した後, 巡察師ヴァリニャーノの五畿内訪問に同行して, 天正九年二月四日(ユリウス暦1581年3月8日)に再び沖ノ浜から五畿内に向かい, 同年10月3日に臼杵に戻っている。

フロイスが有名な『日本史』編述の命令を受けたのは, 天正十一年(1583年)のことである。当時フロイスは, 口之津(長崎県)にいたと考えられている。その後, 長崎や下関を拠点に執筆活動を続けるとともに, 五畿内を訪れること2度。しかし, 天正十五年六月十九日(グレゴリオ暦1587年7月24日)に秀吉の伴天連追放令が発せられると, フロイスは畿内を去って加津佐(長崎県)を経たのち, 天正十八年(1590年)からは長崎に落ち着いた。文禄元年(1592年)にはヴァリニャーノとともに一時マカオに渡ったが, 文禄四年(1595年)に長崎に戻り, 『1596年日本年報補遺』を執筆後, 慶長二年(1597年)に長崎で死去した。

このようにフロイスは, 1577年1月~1581年3月の4年間, 豊後に在住している。しかも都との行き来のため, 少なくとも3度, 沖ノ浜を発着している。したがって, フロイスは沖ノ浜の地形や地勢を熟知していたと考えられる。

2.3 沖ノ浜のブラス

しかし, 『1596年日本年報補遺』における津波の様子は, フロイス本人が体験した訳ではない。フロイスに沖ノ浜における津波被害の様子を伝えたのは“沖ノ浜のブラス”である。それは, 『1596年日本年報補遺』の記述から確認できる(史料1の下線部参照)。

このブラスの素性であるが, 史料1からは, 沖ノ浜で宿泊所(船宿)を営んでいる人物であることがわかる。ブラスと呼ばれているが日本人である。天文二十

年(1551年), 当時周防にいたザビエルは, 豊後にポルトガル船が入港したという情報を得て, かつ大友義鎮から招待状を受けたこともあり豊後を訪れたが, その際に義鎮は, ザビエルの宿舎として沖ノ浜の住人に家を提供させた。この時, 宿舎となったのが, ブラスの家であったといわれている[岡本(1970)]。彼と妻や兄弟は, ザビエル神父の教えを聞いてキリスト教に改宗し, やがて「沖ノ浜のブラス」と呼ばれるようになった。

以上述べたように, 史料1における豊後地震津波の様子は, 1551年からポルトガル人と接しキリシタンとなった日本人ブラスが体験したことをフロイスに伝え, フロイスが記述したものである。ブラスのポルトガル人との交流は40年以上にわたることから, ブラスはポルトガル語にもある程度長けており, 日本語に堪能であったフロイスとの意思疎通に支障はなかったと推察される。

そして, 服部(2010)は, フロイスが執筆した『日本史』について, 「織豊時代の日本側史料にはない多くの情報をもたらしてくれる。その高い史料価値, 貴重性については論を待たない」, 「布教目的の情報収集者・諜報員ともいえるフロイスが, イエズス会日本管区組織の検閲という前提がありながら, 不正確な情報をローマに送ったとは考えられない。記述は彼やイエズス会が認識した限りで正確なものであった。」と述べている。筆者らも, フロイス『日本史』のもとになったイエズス会書簡については, 布教に資するための情報を収集し報告することを目的としており, 宗教関係の誇張や偏見の記述を除けば充分信頼性はあると考える。特に, 『1596年日本年報補遺』については, ヴァリニャーノにより制度化された後の書簡である。

§3. 先行研究

さて, 上記のような経緯で遺された豊後地震津波に関する報告であるが, 津波高の観点で, 先行研究がどのように評価しているかを以下にまとめる。

3.1 「瓜生島」調査会(1977)

大分大学の加藤知弘らが「慶長の地震の時海没した瓜生島地震の記録を上梓」したものである。複数の著者による調査報告からなる第一部と, 史資料を収集・整理した第二部からなる構成となっている。後者の中で, 比較的信頼性の高いと考えられる史料のひとつとして「イエス会のルイジ・フロア(フロイス)神父の報告」(『1596年日本年報補遺』のこと)を引用し, 「そ

の波は町の上に7ブラッチョ(1ブラッチョは0.594米)以上も立上りました。」と記述している。当該資料にはこれ以上の記述(解説)はないが、換算すると津波高は4.2mとなる。

なお、上記邦訳は、『大分県史料(14)第三部』(4.2で詳述)から転載したもので、東洋文庫所蔵のイタリア語版からの邦訳である旨が示されている。

3.2 羽鳥(1985)

津波史料をもとに別府湾沿岸を現地調査し、地盤高をふまえて各地の津波の高さ(平均海面上)や浸水域の広がりを検討した羽鳥(1985)は、「ポルトガル宣教師ルイス・フロイスの報告(イタリア語に翻訳されたもの)」を根拠として、「ポルトガル宣教師の報告には、町の上に7ブラッチョ(平均値4.8m)以上も立上がったとある。」と記述している。参考文献として『沈んだ島』『瓜生島』調査会(1977)]を示していることから、情報源は3.1に示す資料と考えられる。そして、ブラッチョについて羽鳥(1985)は、「単位の辞典によれば、bracciaはイタリアの古い長さの単位で、大小各種にわたる。15～39インチまたは38～100cm。」と記述している。38cmと100cmの平均を取って69cmに7を乗じて4.8mと津波高を推定したと考えられる。

3.3 加藤(1996)

中世豊後における異文化交流に係る研究成果を一般向けに取りまとめたものである。本著では、まず史料の観点での記述としては、『1596年日本年報補遺』について、松田(1987)による邦訳を転載し、「町よりも7ブラサ以上(1ブラサ=約2.2m)の高さで(波が)打ち寄せた。」と記述している[ただし、松田(1987)の当該箇所には1ブラサ=約2.2mとの記述はない。加藤(1996)による加筆である。]。そして、別府湾における活断層調査について記述した箇所においては、「約400年前の「瓜生島」地震をひき起した断層は、浅部のごく新しいものと推定されるが、この直下型地震によってフロイスなどの伝えるような津波(波高14～15m)が発生したものと考えられる。」と記述している。

ここで加藤(1996)は、本著について、「『瓜生島』調査報告を含めて大幅に書き改めました」と記述している。3.1で示した「瓜生島」調査会(1977)では、津波高を4.2mとしていたが、本著において津波高を14～15mと見解を改めている。これは、松田・川崎(1977)で1ブラサ=約2.2mと示されたこと(ただし、豊後地震に関する記述ではない。)、及び松田(1987)のラテン

語版からの邦訳で7ブラサと訳されたことを受けて従来の見解を修正したものと推察される。しかしながら、14～15mという津波高の真偽についての考察はなされていない。なお学術論文としては、加藤(1997)にまとめられている。

3.4 東光(2011)

東光(2011)の著者東光博英は、『1596年日本年報補遺』の邦訳を収載した『十六・七世紀イエズス会日本報告集』(全15巻)[松田(1987-1998)]の翻訳者一人である(ただし、『1596年日本年報補遺』の翻訳者ではない)。この文献は、2011年の東日本大震災を受けた寄稿文であるが、「7ブラサ(septem cubitis)」は約14mに当たるので、別府湾沿岸にそれを超える津波が押し寄せたことになる。」と述べている。イエズス会書簡の翻訳者間においては、1ブラサ≒2mという認識が依然として残っていることがわかる。なお、cubitisはラテン語であるが、4.3で詳述する。

3.5 平井(2013)

東日本大震災の直後に大分県はいち早く津波対策の再検討を実施した。その「地域防災計画再検討委員会」における作業の結果として導き出された知見をまとめたものが、平井(2013)である。

イエズス会書簡について、史料としては松田(1987)の邦訳を引用し、「町よりも7ブラサ以上の高さで(波が)打ち寄せた。」と記述している。そして、既往研究で用いられた『大分県史料(14)第三部』の底本となった史料について言及し、「この文献は、イタリア語で記された出版物である。よって、そこに記されている「sette braccia」という津波高は、イタリア語の長さの単位「ブラッチョ」と解釈すると、1ブラッチョが約0.59mであるから、約4.2mということになる。」と述べ、さらに、「ところが、ルイス・フロイスが著した原文はポルトガル語であって、そこにはポルトガル語の長さの単位である「ブラサ」が使われ、「sete braças(7ブラサ)」と記されていたのである。ポルトガル語の「ブラサ」は、約2.2mのことであるから、この「7ブラサ」は約15mの意味になってしまう。しかも、記述によるとこの津波高は「或る非常に丈の高い古木の頂上によって知られた」とあるので、これは津波の遡上高ではない。明らかに純粋な津波高と解釈される。これが遡上高となると、おそらくその高さは地形にもよるが、倍増という規模となるだろう。3.11の東日本大震災の津波と比較しても、トップクラスの津波高ということになる。内海の断層型

の地震津波が、海溝型の地震津波を超える事例ということになるのである。この記録された津波高を評価できるのか否かが大きな問題となってこよう。」と述べている。ポルトガル語のブラサの問題を初めて提起した知見であり、15 m という津波高さに疑問を呈している。そして、岡藩の舟奉行について記した『柴山勘兵衛記』における記述とも対比を行い、「沖ノ浜」の住民が、木造の家の屋上に逃れて助かったという記録があることは、この地震津波をイメージする上で極めて貴重なものとする。柴山勘兵衛が日記に書き残した記事の内容と、15 m の津波(遡上高ではない純粹な津波高)とは、とても整合しないと思われるのである。」としている。そして、別府湾における津波痕跡高を整理するに際しては、「ルイスフロイスが記した「イエズス会報告」にある 15 m と解釈される津波高は、ここでは採用しない」という判断を下し、沖ノ浜の津波高として 4~5 m を採用している。

なお平井は、イエズス会関係史料が、「これまでほとんど無視され歴史研究者の間で取りあげられることはなかった。そもそも、キリスト教関係の史料には、奇跡が伝えられることもあって、史料全体を全く信用しないという研究者も少なくはなかった。」とこれまでの研究者の姿勢に警鐘を鳴らしている。

※平井(2013)にはいくつかの誤植があるので、引用にあたっては筆者らの責任で訂正した。

3.6 小括

以上、4 つの先行研究を整理すると(表 1)、「瓜生島」調査会(1977)と羽鳥(1985)は、イタリア語版からの邦訳[『大分県史料(14)第三部』]をベースに 4~5 m の津波高を推定している。一方、加藤(1996)及び東光(2011)は、松田(1987)のラテン語版からの邦訳を引用し 14~15 m という値を推定している。他方、平井(2013)は、イタリア語版とラテン語版からの両邦訳を吟味し、津波高 15 m に疑問を呈し、最終的には 4~5 m という値を採用している。このように食い違いが生じているのは、イエズス会書簡が種々の言語に翻訳され、その種々の翻訳版をもとに幾度も邦訳がなされていることが一因ではないかと考える。実際、前述したとおり、単位として *braça*, *braccia*, *cubitis* が用いられており、混乱が見られる。そこで、イエズス会書簡の主な邦訳実績を次節で整理することとする。

§ 4. イエズス会書簡の主な邦訳実績

4.1 村上直次郎による邦訳

近代において、イエズス会書簡を初めて邦訳したのは村上直次郎である。村上は、1926~1944 年にかけて、いくつも邦訳版を刊行した(表 2)。これらは、1598 年出版の『耶蘇会のパードレ及びイルマン等が日本及び支那両国より印度及び欧州の同会員に送りたる書翰』(ポルトガルのエボラで印刷・出版されたことから「エボラ版」と呼ばれており、言語はポルトガル語)を底本として邦訳されたものである。

これらの邦訳において村上は、1548~1587 年に記された書簡を邦訳している。したがって、『1596 年日本年報補遺』は含まれていない。

4.2 『大分県史料(14)第三部』

続いて発刊された邦訳版は、大分県史料刊行会(1962)による『大分県史料(14)第三部』である。

日本年報の初めである 1579 年以降について、主として豊後に関する部分を邦訳している。そして、「訳出については主として東京外国語大学イタリア語教室関係各位の協力を得た。」としているので、底本はおそらくイタリア語版と考えられる。

この邦訳には『1596 年日本年報補遺』が含まれており、『大分県史料(14)第三部』における当該部分を以下に転記する。

[史料 2]

「この地震と同時に、豊後において起った事件は非常に重大で且つ恐るべきことで、これを報告した彼の地から来たキリスト教徒の口からその報せを受けなかったら信用出来ないことでしょう。

豊後の最も古いキリスト教徒の一人が到着するのを待っていました。その男はピアジオと呼ばれ、立派な男で、神を畏れ、めぐり合った大きな危険から逃れた男で、この地に到着するや、あの場所で過ごしたことをわれわれに物語りました。そして現在でも(そのことが起ってから既に 2 か月にもなるのに)自分自身をとり戻していないし、自分の生国の瓦解の驚きを取り除くことが出来ないと言っています。

府内の近くに、三哩離れたオキノファマ(沖ノ浜)と呼ばれる大きな村があります。多くの船の寄港地であり、揚陸地です。この立派な男は、この地名にちなんでオキノファマのピアジオと呼ばれ、豊後では良く知られていますが、それはこの男の家が各地から来る多くの人たちの収容所になっているからであります。こ

の男の言うには、夜間突然あの場所に風を伴わず海から波が押しよせて来ました。非常に大きな音と騒音と、偉大な力で、その波は町の上に7ブラッチョ(1ブラッチョは0.594米)以上も立上りました。

その後、高い古木の頂から見えたとところによると、大変気狂いじみた激烈さで、海は一哩も一哩半以上も陸地へ這入りこみ、波がひいたとき、沖ノ浜の町の何物をも残しませんでした。」

この邦訳の前段には、「イエス会のローマ人フランチェスコ・メルカーティ神父によってイタリア語に翻訳」と注釈がある。筑波大学が Francesco Mercati 著、1599年ミラノ発刊のイタリア語版を所蔵しており、『大分県史料(14)第三部』の底本は、このミラノ版であろうと思われる。そしてこのミラノ版には、7ブラサの箇所は、「sette braccia」(7ブラッチャ)と記述されている。『丸善単位の辞典』[二村(2002)]によれば、braccio(ブラッチョ。複数形が braccia)は古代イタリアの長さの単位で、ふつう66~68cmであるが、46~71cmの場合もあるとされている。また、『単位の起源事典』[小泉(1982)]では、38~100cmとされている。『大分県史料(14)第三部』は、イタリア語版の「sette braccia」を、フロイスが執筆した原本がポルトガル語であることを考慮せず、そのまま「7ブラッチョ」と訳してしまったのである。

「瓜生島」調査会(1977)は、この『大分県史料(14)第三部』を引用したものである。さらに、「瓜生島」調査会(1977)による豊後地震に関する記述は、『新収日本地震史料第二巻』[東京大学地震研究所(1982)]にも収録され、歴史地震の分野においても広く知られることとなった。

4.3 『十六・七世紀イエズス会日本報告集』

次に、邦訳がなされたのは、松田毅一監訳のもと1987~1998年にかけて出版された『十六・七世紀イエズス会日本報告集』(全15巻)である。『1596年日本年報補遺』については、第1期第2巻[松田(1987)]に収録されている。その邦訳については、史料1に前掲した通りであり、「7ブラサ」とされている。

松田(1987)が当該箇所について底本としたのはジョン・ヘイ編『日本、インド、ペルーの事情についての最近の書簡』(ラテン語版、アントワープにて1605年発行)である。筑波大学が1605年アントワープ発刊版を所蔵しており、これによると、当該箇所は、「septem cubitis」となっている。「cubitis」はラテン語の

cubitum[肘から中指の先までの長さ由来する単位(身体尺)で50cm程度(図3)]の複数形である。松田(1987)は、フロイスがポルトガル語で執筆したことを認識し、「septem cubitis」を「7ブラサ」と訳したのであろう。ポルトガル語に braçal という単語があり、「腕の」という意味であるが、cubitisも braçaも腕の長さ起因する身体尺であり、同じ長さだと判断したのではないかと考える。

ここで、ヘイは既刊の書物からラテン語に翻訳したが、『1596年日本年報補遺』の底本は、「Mainz,1599」と記されており、底本がドイツ語版であった可能性もある。とすると、原本がポルトガル語であるにも係らず、ラテン語以外にもドイツ語を経て邦訳(重訳)された可能性がある。したがって、重訳の過程において単位の取り間違いが生じなかったかの危惧を感じる。

4.4 『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』

『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』[東京大学史料編纂所(1990-2014)]は、東京大学史料編纂所が編纂・発行している史料であり、「本邦に関する外国文の代表的な史料を、最良の底本によって、近代の字体に翻字し、厳密な校訂を施し、欠失した箇所のあるものはその逸文をも收拾し、複本のあるものはこれと校合しつつ、所要の脚注を加えた原文編と、その本文を努めて原文に忠実に邦文に訳出した訳文編とから成る」とある。1990年から2014年にかけて、原文編3巻(3冊)、訳文編3巻(5冊)が発行されており、天文十六年(1547年)から永禄二年(1559年)の書簡が邦訳されている。

4.5 フロイス『日本史』

本論からはやや外れるが、著名なフロイスの『日本史』についても触れておきたい。

フロイスは1583年に日本布教史の著述の命を受け、過去の書簡等を参考にして、天正十四年(1586年)に第一部(1549~1578年)を擱筆した。その後第二部(1578~1589年)をとりまとめた後、第三部の執筆に着手したが、1597年に逝去した。『日本史』の原稿がどこまで進んでいたかはわからないが、現存する写本は1594年初めの頃の記事で終わっている。つまり、豊後地震に関する記述は収録されていない。

『日本史』の初めての邦訳は高市(1932)によりなされたが、第一部の途中で頓挫した。1963~1978年にかけては、『日本史 キリシタン伝来のころ』というタイ

トルで全 5 巻[柳谷(1963-1978)]が出版された(第一部のみ)。その後、松田毅一・川崎桃太により 1977～1980 年にかけて、『フロイス日本史』(全 12 巻)が出版され、ようやく第一部から第三部にわたる邦訳が完成した。(表 2 参照)

また、ポルトガル語の活字本としては、José Wicki により、1976～1984 年にかけて、『Historia de Japam』が作成された。

4.6 小括

以上述べた通り、『1596 年日本年報補遺』はイタリア語版及びラテン語版から邦訳された。フロイスは日本年報をポルトガル語で執筆したことから、既往の邦訳・研究は、全て重訳に基づいていることになる。そして、ポルトガル語版からの邦訳はない。イタリア語版では「sette braccia」、ラテン語版では「septem cubitis」と記述されていることから、原語であるポルトガル語版で如何に記述されているかは、非常に重要なことと考える。そこで筆者らは、ポルトガル語版に立ち返って確認することとした。

§ 5. 『1596 年日本年報補遺』ポルトガル語版

5.1 白杵市教育委員会所蔵

1996 年 12 月 19 日付けの大分合同新聞(夕刊)に、「フロイスの原文を入手」という見出しのついた記事が掲載された。「沖の浜(瓜生島)と当時の大地震のことを記した宣教師ルイス・フロイスの書簡(ポルトガル語)をこのほど、ポルトガル政府派遣の県立芸術文化短大客員講師・パウラ・サントスさん(26)がマイクロフィルムで入手した。」と報じている。これは、「1590 年以後の在留イエズス会士の書翰は、今までイタリア語訳の刊本しかなかったので、小生もそれを使っていたが、近頃はローマに発信者自筆書翰またはそれに近いもののあることがわかりました」[岡本(1970)]という情報を得ていたところ、「南蛮資料館」の建設構想を持っていた白杵市が、ポルトガル資料収集の目的でローマのイエズス会文書館にパウラ・サントスを派遣し、持ち帰ったデータ(マイクロフィルム)の中に豊後地震を記述した書簡も含まれていたというものである。現在、これらのデータは白杵市教育委員会が所蔵している。

5.2 マイクロフィルムの翻刻

白杵市教育委員会が所蔵するマイクロフィルムから津波に関する部分を翻刻及び邦訳したものを下記

に示す。

[史料 3: 翻刻]

「Esta hũ lugar marítimo perto de hũa legoa de Funai escala, e porto de muitas embarcações que Era huma grande villa por nome Oqinofama, donde este bom homem se chama Bras de Oqinofama muito conhecido Em Bungo per sua casa ser hospedaria de muita gente de diversas partes. Diz que de noite deraõ naquella povoação de repente duas ou tres ondas sem nenhũ vento cõ tamanho estrondo E bramido, E ellas taõ encapelladas que se alevantaraõ mais de sete braças sobre a povoação, como depois constou pellas pontas de hũas arvores mui altas, E antigas que depois apareçeraõ. E cõ aquelle furioso impeto entrou o mar perto de meia legoa, ou mais pla terra adentro, E quando as hondas fizeraõ resaca nenhũa cousa deixaraõ da povoação de Oqinofama,」

※原文は 16 世紀のポルトガル語であり、イタリック文字は原文における省略文字を補ったもの(例: que の原文は q の上に省略を表す[~]が付いたもの)

[史料 3: 邦訳]

「さて、フナイからおよそ 1 レグア、とある海沿いの町があって、多くの船舶の停泊地、そして港であり、オキノファマという名の大きな町であったが、そこからこの良い男はブラス・デ・オキノファマと呼ばれていて、自らの家がいろんな地方からの多くの人々の宿泊先であったためブンゴではよく知られていた。かれが言うには、夜、この集落に、突然、まったく風もないのに、大きなとどろきと海鳴りとともに、二つか三つの波がやってきて、そしてそれはとても波立ち、その後に姿を現した古くて高い木々の梢から後に推し量ったように、集落の上に 7 ブラサ以上も立ち上った。そして、この激しい衝撃とともに、海が半レグア近くあるいはそれ以上陸地の中に入ってきた。」

ポルトガル語版には、集落(povoação)の上に 7 ブラサ以上の波が立ち上がったと記述されていることを確認した。これより、フロイスが 7 ブラサと記述していたと判断してよいと考える。そして、ブラスは津波の高さを梢(pontas de hũas arvores)、則ち小枝(の被災状況)から推量したと考える。

§6. ブラサの検証

前節までで、7 ブラサという記述には誤りがないことを確認した。引き続き本節では、ブラサの単位長に着目して検討したい。すなわち、1 ブラサが本当に2.2 mなのかを検証したい。

6.1 ブラサに関する知見

6.1.1 既往の見解

まずは、これまでブラサの単位長がどのように判断されてきたかを整理する。

①村上(1927)

村上(1927)は、1548～1569年の書簡を収録している。その156頁に、「1 ブラサは2 m²分にして」との記述がある。筆者らが調べた範囲では、ブラサの単位長について2.2 mと言及する最も古い文献である。

②松田・川崎(1977)

松田・川崎(1977)は、「本書に出てくる長さの単位について。通常「ブラサ」は2.22 m、農村では両手を左右に広げた広さ。「デード」は2.75 cm、だいたい指の太さ。「パルモ」は22.1 cm、だいたい、指を開いた親指から小指の先までである。しかし、フロイスが本書でこれらの語を用いる場合、どれほどを指したかは個別に検討を要するのであり、本文中の随所に注記してある。」と述べている(ブラサについては図3参照)。さらに、「ブラサは往時のポルトガルにおける長さの単位で、2.2 mにあたり、農村では両手を左右に広げた長さであるとふつうに解されている。しからば、フロイスが「日本史」において記しているブラサはどれだけの長さを指しているであろうか。「日本史」第1部61章に掲げられているアルメイダの書簡には、「日本人はヨーロッパ人のブラサ(単位)で測るのではなくて、畳(8 パルモ×4 パルモ)を標準とする」との注目する記事がある。これによれば、在日イエズス会員は、日本の「里」を「レーグア」と表現したように、「間」を「ブラサ」として記したのではあるまいか、といちおう考えられる。しかし、それを決めるには、多くの例を挙げねばならぬし、今までのところ、吾人が検討したところでは、そのように認められる例もあり、矛盾することもある。断定できかねる。」とも述べている。つまり、松田・川崎(1977)は、村上(1927)の見解や一般的なポルトガル語辞典の内容を踏襲し、一応1 ブラサ=2.2 mとしながらも、その適用には疑問を呈しているのである。

③『単位の起源事典』[小泉(1982)]

ブラサについて、

「単位名:braça

国、地方名、相当単位など:ポルトガル、ブラジル
換算値:メートル系 2.20 m]

と記述している。

④松田・他(1987)

松田・他(1987)は邦訳文の中で、

[史料4]

「2間^{ブラサ}、またはそれ以上の高さの頗る美しく光り輝く十字架」

と間^{ほん}にブラサとルビを振り、注で「ブラサはポルトガルでは、2.2 m、又、農村では腕を広げた長さを指したが、在日イエズス会員の報告書では、一般的に、日本の「一間」即ち六尺を意味した。」と解説している。1 ブラサを1間(約1.8 m)と解釈したのは、松田・川崎(1977)が示した考え(6.1.1②)を踏襲したのであろう。

⑤松田(1987-1998)

『1596年日本年報補遺』が第1期第2巻[松田(1987)]に収載されている。その概要は4.3に、その訳文は史料1に前掲したが、ここにはブラサの単位長に関する見解は示されていない。これは、松田(1987-1998)は、複数の翻訳者が分担して邦訳した書簡を松田毅一が監訳したものであり、そのためか、注釈がほとんど付けられていないものである。

しかしながら、『1596年日本年報補遺』の邦訳を担当した家入敏光は、当該部分ではブラサの単位長について言及していないが、1623年の書簡の邦訳においては、

[史料5]

「点火された火と敬虔な殉教者たちの間は、特別な注意を払ってひどく間隔を離して置かれた。幾人かがそれに気がついて、その距離を測ったところ、火と殉教者たちとの間隔はおおよそ3 ブラサ(約5.01 m)あることが判った。」

と記している。1 ブラサを1.67 mと解釈していることとなる。ただし、これ以上の解説はない。一方で有水博による1585年の書簡の邦訳では、

[史料 6]

「我らの教会の三筋か四筋南に、長さ五十^{ブラサ}間、巾三十^{ブラサ}間の土地で、ずっと昔に作られた堀が廻りにある土地を買い、直ちにそこに十字架一基を建てることを決めた。」

と、間^{けん}にブラサというルビを振り、1 ブラサを 1間^{けん}とする解釈も記載されている。

松田(1987-1998)は、「本叢書の読者や、史料として引用される方々が困惑されることのないように監訳者のもとで訳語を統一してある」と述べているが、ブラサの単位長に関しては統一に至らなかったように思われる。

⑥ 東京大学史料編纂所(1990-2014)

『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』において、1991 年発行の訳文編之一(上)では、「その風が船を 3, 4 ブラサも陸地へ打ち上げる」との邦訳箇所、^①「1 ブラサ *braça* は往時の長さ 8 パルモ *palmos* に当たる。1 パルモは 22 cm にして、1 ブラサは 1.76 m。現在は 1.83 m。」と述べている。一方、2000 年に発行された訳文編之二(下)では、水深 3 ブラサ半との記述について、「1 ブラサ *braça* は約 2.2 m」と述べており、統一が取れていない。

以上に示したように、既往研究や単位事典の多くには、2.2 m という見解が示されている。しかし、昭和後期におけるイエズス会書翰研究の第一人者である松田毅一は、松田・川崎(1977)の執筆時に 2.2 m という値に疑問を感じており、松田(1987)では豊後地震に関する箇所においてブラサの単位長に関する言及はない。一方で、松田(1987-1998)等では 1 ブラサを 1.67 m や 1間^{けん}(約 1.8 m)とする見解も確認でき、ブラサの単位長については混乱していると言わざるを得ず、確定した見解には至っていない。

6.1.2 中世西欧の単位の整理

ここで、中世西欧の単位について整理したい。

西欧の単位制度は、古代オリエントにその源流を持つ。そして、メソポタミアの長さの基本的単位は、ひじの長さに始まる「キュービット:cubit」(図 3)である。このキュービットは、諸方に流布するうちに、それぞれの国のひじを意味する言葉に変わり、あるいは別の意味の名称に変わった。ラテン語では *cubitum*、イギリスでは *ell*、イタリアでは *braccio* などである[小泉

(1982)]. そしてその過程において、「その 2 倍に相当する単位、そのまた 2 倍に相当する単位をもたらした。ただし長年月の間には取違えも生じた模様で、イタリアの *braccio*、オランダの *el* などは、本来の腕の長さとも、その 2 倍または 4 倍とも解されて、混乱を引き起こした。」[『世界大百科事典』[平凡社(2007a)]]。その背景は、例えばメートル法を導入する以前の中世フランスでは、「度量衡の制定権を地域の封建領主が握っていたため、錯雑をきわめていた」[『世界大百科事典』[平凡社(2007b)]]ことも理由の一つであろう。絶対王政のもと中央集権色の強い中世ポルトガルでも、フランスほどではないが地域の封建領主が存在しており、*braccio* と同様に、地域と時代でブラサの単位長が異なっていた可能性がある。

現在のポルトガルにおいては、1 ブラサは一応約 2.2 m と解されている。そして、松田・川崎(1977)によると、「通常「ブラサ」は 2.22 m、農村では両手を左右に広げた広さ。」とのこと。両手を左右に広げた長さとしては、一般的にはファズム(*fathom*)がある。日本の尋に当たる単位であり、概ね 1.8 m 程度である(図 3)。松田・川崎(1977)が言うように、ブラサが両手を左右に広げた長さとする、約 2.2 m は少し長すぎはしないだろうか。身長 190 cm のモハメッド・アリのリーチ(ファズムに相当)は 203 cm である。“キンシャサの奇跡”の対戦相手:ジョージ・フォアマンは身長 192 cm、リーチ 208 cm である。アリやフォアマンよりも大きな男たちが中世ポルトガルの農村に大勢いたとは考えられない。現在認識されている 2.2 m という値は、何らかの理由で、パルモ(6.1.1②)で既述 =22.1 cm)の 10 倍と人為的に設定されたものではないかと考える。ポルトガルが 1859 年にメートル法を導入[金七(2010)]する時、ブラサの単位長の混乱を解消するために、2.2 m と規定したのではないだろうか。

6.1.3 小括

以上述べたように、1 ブラサは一応 2.2 m と解釈されてはいるが、松田・川崎(1977)が疑問を呈しており、それに対する明快な見解は確認できない。さらに中世のブラサは、地域と時代で単位長が異なっていたために混乱が生じていた可能性がある。したがって、フロイスらが用いたブラサの単位長を検証するためには、当時のフロイスらの記述から判断するしかないと考えられる。

6.2 ブラサの単位長

6.2.1 京都・奈良の建造物の長さに関する記述

フロイスらは永禄八年(1565年)に都を訪れている。その際、フロイスが京都で、アルメイダが奈良で、建造物の長さを書簡に記述している。また、フロイスらよりも先に1559年末から畿内で布教活動に従事していたポルトガル人司祭ヴィレラもそうした書簡を遺している。これらには、三十三間堂や春日大社など、現存する建造物に関する記述もある。これよりブラサの単位長を推定する。ただし、下記にあげる建造物以外にも、周防山口の教会の大きさや大坂の教会敷地の広さに関する記述もあるが、これらの建造物や地所は現存しないので検証に用いることができなかった。

また、これらの書簡は、村上(1927, 1928)、松田・川崎(1978)などによって邦訳されているが(表2)、松田・川崎(1978)は『日本史』の邦訳であり、フロイスが各種書簡をもとに1583~1586年の間に編纂した文章である。そこで、ここでは書簡そのものの邦訳である村上(1927, 1928)を使用する。以下では、まず村上(1927, 1928)の記述を転載した後に、単位長について考察する。

①三十三間堂

「都の往時の皇帝の造り新しき皇帝の絶えず修復する堂あり、長さ130乃至140ブラサなり。」

三十三間堂(蓮華王院本堂)は平安後期に後白河上皇が創建した。その後焼失したが、文永三年(1266年)に再建され、これが現存する。したがって、1565年に訪れたフロイスは現存する本堂を見ている。長さ(桁行)は390.14尺(118.2m)[妙法院門跡(1992)]であり、これが130~140ブラサであるから、1ブラサは0.8~0.9mとなる。

②春日大社

「寺院に達する前50ブラサの間両側に方形の石の上に立てる甚だ精巧なる石柱あり。各柱の上に木製の燈籠あり。漆を以て黒く塗り、四面に細工を施し鍍金したる真鍮製の蓋あり。此上に石の屋根あり。石の屋根を以て被はれたるが故に雨も風も燈明を害すること能はず。」

春日大社の石灯籠(図4)を描写したものである。松田・川崎(1978)は、「神社(の本殿)に達する50ブラサ手前のところには」と訳しており、春日大社の本殿

の手前50ブラサの所に石灯籠があると述べている。そこで、春日大社の本殿周辺を図5に示す。まず、「春日神社の現状は治承二年の造営を以て成立し、以後当時の面目と風格とを維持して今日に及ぶ」[黒田(1978)]とされていることから、本殿の位置は不変と考える。そして、廻廊は治承三年(1179年)のものが現存する。さらに石灯籠には天文十六年(1547年)の銘があるものもある。したがって、本殿と石灯籠との距離は、アルメイダが訪れた時から不変と考える。この距離を測ると概ね50mであった(図5)。したがって、1ブラサは約1mとなる。

③東大寺梵鐘

「此処に主なる鐘あり。1人のキリシタンの予に告げたる所に依れば、形非常に大にして、口2ブラサ、周囲6ブラサ、高さ3ブラサ半、厚さ約1パルモ半なるが、甚だ柔なる音を有し、遠く聞ゆる由なり。」

東大寺の梵鐘(図6)は、天平勝宝四年(752年)の铸造である。そして、梵鐘が設置されている鐘楼は承元年間(1207~1210年)に再建されたものである。したがって、アルメイダの見たものがそのままの形で現在に遺されていると考えることができる。「口2ブラサ」は口径(内径)2ブラサと解釈できる。現在外径は2.708m[奈良六大寺大観刊行会(1970)。以降に記す口厚及び高さの根拠も同じ。]、口厚0.238m(両側で0.476m)であるので口径は2.232mとなる。したがって、口径2.232m及び高さ3.855mから単位長を求めると、どちらも約1.1mとなる。また、周長からは、1.4mと求まる。

④東大寺大仏の座高

「釈迦の像は坐して高さ14ブラサ其坐せる台(甚だ美麗なる薔薇なり)は6ブラサなり。」

東大寺大仏は、永禄十年(1567年)に兵火により大破した。したがって、1565年にアルメイダが見たものは原型を留めない。しかしながら、『奈良六大寺大観東大寺二』[奈良六大寺大観刊行会(1968)]によれば、右腋から下腹にかけての部分、両手の前膊と袖の大半、両脚のすべてが奈良時代のものである。ゆえに、現存大仏の座高(14.98m)[筒井・他(2010)]は当時の大仏とほぼ変わらないと考えてよいであろう。これより、単位長は約1.1mと求まる。

⑤東大寺大仏殿の柱の周長

「此堂は杉の柱 98 本を有す。甚だ高く又太く、周囲 3 ブラサ半あり。加工前には 4 ブラサありしと思はれ、悉く輻輳細工を施したるが如し。」

アルメイダが見た鎌倉時代に再建された大仏殿の柱の直径は、九条兼実の日記『玉葉』の文治三年(1187 年)十月三日の条には、母屋柱が五尺二寸、庇柱が四尺八寸と記されている。これより平均値として五尺(1.5 m)として周長を求めると、4.7 m となる。これより単位長は 1.3 m となる。

⑥東大寺大仏殿の桁行(長さ)

「庭の中央に堂あり。長さ 40 ブラサ幅 30 ブラサなるべく、階段、玄関及び床は悉く方形の石を敷き詰め、堂の入口の左右に 2 つの大なる像あり。」

鎌倉期再建の大仏殿は、複数の研究者によって復元的研究が行われており、例えば池(1995)では、桁行(正面幅・書簡でいう長さ)は 290 尺とされている。ただし奈良尺(天平尺:0.296 m)であるから、その長さは約 86 m である。よって 1 ブラサは約 2.2 m となる。

⑦猿沢池

「其入口に長さ竝に幅約 50 ブラサの池あり。」

現在の猿沢池を楕円と考えた場合、その長径は 120 m 程度、短径は 70 m 程度である。当時の猿沢池の寸法は不明であるが、仮に現在の値を用いると、単位長は 1.4~2.4 m と求まる。

⑧東福寺の釋迦如来像

「中央に三箇の偶像あり。其一は大なる男子の十五尋の高さあるべく、其両側に在る他の像は其程大ならざれども、多く之に劣らず。」

これは、14 世紀中頃に再建された東福寺仏殿内の釋迦如来像を見学したヴィレラの記録である。仏像の高さを十五尋と、ここではなぜか「尋」を用いて記述している。6.1.1①で村上(1927)が 1 ブラサ=2.2 m と述べていることを示したが、一方ではブラサには両手を左右に広げた長さという解釈もあり、おそらく村上(1927,1928)は 1 ブラサを 2 m 前後との認識で、ここでは 1 ブラサは両手を左右に広げた長さである 1 尋として邦訳したのではないだろうか。つまり、原文の表記

は 15 ブラサであるとする。その証拠に、同じエボラ版を底本とした松田(1998)の邦訳では、「寺院の中央に三体の偶像があり、そのうちの一体は大男の偶像で、およそ十五ブラサの高さを有する。」と訳されている。よってヴィレラは仏像の高さを 15 ブラサと記していると解釈する。ここで、『東福寺誌』[白石(1930)]の建長二年(1250 年)の項には、「奉安置五丈 釋迦如来像一体坐像」とある。1 丈は約 3 m であるから創建時の釋迦如来像の高さ(5 丈)は 15 m となる。ヴィレラが見た像は、この創建時のものではなく、14 世紀中頃に再建されたものであるが、この再建された像も、明治十四年(1881 年)の火災で焼失し、左手掌を除いて現存しない。しかし、根立(2004)が、焼失前の像の高さについて、「創建当初像と同じ五丈」と推察している。したがって、ヴィレラが見た釋迦如来像の高さは 15 m であり、これが 15 ブラサと記録されているのであるから、1 ブラサは 1 m と評価される。

6.2.2 考察その 1 (1 ブラサ=2.2 m と整合的な事例)

6.2.1 を概観すると、単位長としては 1 m 程度の値が多く得られる(表 3)。しかしながら、2.2 m とする既往の見解と整合的なものもある。猿沢池と大仏殿の長さである。

①猿沢池

猿沢池は天平二十一年(749 年)に作られた人工池であり[大和川清流復活ネットワーク(2012)], 御蓋山(春日山)の南麓を水源にする菩提川の水を引き込んでいる。往時から現在に至るまでの間、人の手が多く加わってきており、その形も大きく変わってきたものと考えられる。当時の大きさが不明であり、現在の大きさと同一であるという保証はない。したがって、現在の猿沢池の大きさから計算された 1 ブラサ=1.4~2.4 m という値の信頼度は低いと考えるべきであろう。

②東大寺大仏殿

次に東大寺大仏殿の大きさについてであるが、アルメイダが執筆した書簡を編纂したフロイスは、『日本史』に、「実は日本の建物、寺院、家屋などは一見してすぐに何ブラサあるのか判るように建てられています」、「畳によって測るのです」と記述している[『フロイス日本史 3(五畿内篇 1)』[松田・川崎(1978)]]。この記述を参考に筆者らが考えるに、大仏殿については、畳を用いて測定したのではなく、柱の数を数えて換算したのではなかろうか。その際、大仏殿は左右対称

の構造であるため、片側だけを数えて2倍し忘れた、あるいは、鎌倉期再建の大仏殿の桁行(正面幅)は11間(11柱間で約86m)であるが、大仏殿があまりにも大きかったため、柱間の単位長さを間違えて換算した可能性などの人為ミスが考えられる。大仏殿が巨大な構造物であるが故に、その計測には人為ミスが介在する可能性が高く、信頼性に劣る値となってしまったと推察する。

③松田・川崎(1977, 1978)の考察

実は、表3で示した京都・奈良の構造物におけるブラサの単位長に不整合が生じていることは松田・川崎(1977, 1978)も認識しており、種々の考察を行っている(表4)。1ブラサ=2.2mとの立場を採用した松田・川崎(1977, 1978)は、その考えと整合しない構造物について、大仏の座高については、「14ブラサというのは誤解であろう。「9ブラサ」くらいというのが正しい。」、梵鐘については、「けだし謄写の誤りであろう。」、三十三間堂については、「それでは1ブラサが約90cmとなり、短過ぎるようである。」と述べているが、その理由を全て誤解・誤記等に帰着させており、合理的な説明はできていない。

6.2.3 考察その2 (1ブラサ長の再考)

そこで、筆者らは、これまでの整理と考察に基づいて、以下のように考える。

①大仏殿の柱の周長

仮に1ブラサが2.2mであったとすると、アルメイダは大仏殿の柱の周長を3.5ブラサ(7.7m)としているので、直径が2.5mとなる。天平期に創建された大仏殿の柱の直径が1.2m、鎌倉期再建が1.5m、江戸期再建が1.0~1.7m(ただし合材)であったことから、1ブラサ=2.2mは考え難い。

②14~15mの津波高と高木

史料3によればフロイスは、ブラサが古くて高い木々の梢から津波高を推定したと記述しているが、これらの木々は、ブラサの宿泊所を含む集落を高潮や潮風から守るために植栽された防潮林であろうと思われる。ここで、津波強度と被害に関する首藤(1992)の研究によれば、防潮林は波高が8m以上になると全面的被害を受けるとされている。1ブラサが2m程度であるとする、津波高は14~15mとなるが、ほとんどの高木は流失してしまうと考えられ、高木の被災状

況から津波高を推定することはできないのではなかろうか。ゆえに1ブラサ=2.2mは考え難い。

③両手を左右に広げた長さとの認識

アルメイダ(厳密には計測した随行のキリシタン)が、ブラサは両手を左右に広げた長さであると認識していたならば、梵鐘の口径は直接手を広げて測定できるものであり(図6)、1ブラサ強と認識したはずである。そうではなく、2ブラサと計測していることから、ブラサは両手を左右に広げた長さとの認識はなかったと判断できる。すなわち、2m程度の単位長ではなかったと言える。むしろ、ブラサは両手を左右に広げた長さの半分で、1m程度との認識だったのではなかろうか。

④計測の信頼性

前述した構造物の中で最も信頼性が高いと考えられるのは東大寺梵鐘である。梵鐘は天平勝宝四年(752年)の鑄造であり、アルメイダが見たものが現存する。大きな構造物ではないことから、計測の精度も高いと推察される。そして、梵鐘の寸法の中でも口径は、近づいての計測が可能であり、最も信頼性が高いと考えられる。それより得られる単位長は約1mである。

⑤三十三間堂の計測方法

東大寺大仏殿のところで、柱間数を数えて計測したのでであろうとの旨の記述をしたが、三十三間堂も同様に計測したものと考える。そして、三十三間といわれているものの、これは内陣の柱間が33あるのであり、建物外部から見る柱間は35である。140ブラサを35で割ると柱間は丁度4ブラサとなる。柱間の寸法は、11.0325尺~13尺[京都古蹟研究会(1950)]、つまり3.34~3.94mであるが、フロイスはこれを4ブラサ弱と判断したのではないだろうか。4×35で140ブラサと計算し、基本とした長さが4ブラサより少し短いことから130~140ブラサと推計したと推察する。そして、三十三間堂の長さは、フロイス自身が計測・記述したものであることにも留意したく、これからは1m弱の値が求まる。

⑥茶室

京都や奈良の構造物以外にも、アルメイダは堺滞在時に豪商日比屋了珪から茶会に招かれた時、茶室の大きさを、ブラサを用いて、「我等は長さ竝に幅2

ブラサの庭に出て縁を通りて食事をなすべき家に入りたり。其大さ庭より少しく廣く」と記している。永禄年間(1558～1570年)の堺の豪商(天王寺屋道叱, 今井宗久ら)の茶室は, 堀口(1990)によって四畳半であったことが指摘されており, 当時の茶室は四畳半(2.7 m 四方)が標準であったと考えられる。したがって, 1 ブラサを 2.2 m ではなく, 1 m と考えれば, 茶室の方が庭よりも少し広いという記述を素直に理解できる。

以上の考察に基づき, フロイスらは 1 ブラサを 1 m 程度と認識していたと判断する。

6.2.4 考察その3 (『日本大文典』と『日葡辞書』)

ここで、『日本大文典』と『日葡辞書』なる史料に言及しておく必要がある。『日本大文典』は, イエズ会宣教師ロドリゲスが, 1604-1608年に, 日本語の上達していないポルトガル人宣教師のためにポルトガル語で書いた日本語の文法書である。

この史料には, 1 丈(約 3 m)が 2 ブラサに等しい旨が書かれている。つまり 1 ブラサ=1.5 m と書かれているのである。『1596 年日本年報補遺』と同時代の史料であり, この意味するところは大きい。しかし, 本史料については以下のように考える。

- ①当時ブラサには混乱が生じていた可能性があり, ロドリゲスのブラサとフロイスらのブラサとが同一である保証はない。ロドリゲスとフロイスらとでは, 世代が異なっていること(表 5)も, そのように考える根拠の一つである。
- ②そして, 1560 年代の京都・奈良の構造物の寸法を記述したフロイス, アルメイダ, ヴィレラの単位長は約 1 m でほぼ整合する。
- ③フロイスは 1597 年に, アルメイダは 1583 年に, ヴィレラは 1572 年に死去しており, 1 丈=2 ブラサという記述は, フロイスらの検証を受けていない。
- ④本史料は, 日本に不慣れたポルトガル人宣教師の理解を得やすくするために, 日本の長さの単位に対して無理やりポルトガルの単位を押し付けたと感ぜられるところがある。例えば, 日本の里(3.9 km)に対しては, 人が徒歩で 1 時間に進める距離を示すポルトガルの単位であるレグア(当時は 4.4 km, 現在は 5.0 km)をあてがっている。ブラサと丈についても, このようなひずみを含んでいることが考えられ, 精度は高くないと考える。

また、『日葡辞書』(1603 年。ポルトガル語)も来日するポルトガル人宣教師が日本語を学ぶ上

での手助けとなるようにと編纂されたものであるが, その中で, 尺(xacu)は「1 palmo(筆者注: 6.1.1②で既述のパルモと同じ)よりも少し長い」との旨の解説はあるが, 丈(gio), 里(ri), 間(quen)については解説がない上, 尺や間とブラサの関係も全く記されていない。

⑤6.2.1③及び⑤の記述から, フロイスらの計測は半ブラサの精度を有することを確認できる。仮に, 1 ブラサが 1.5 m であったとすると, 精度の高い計測が可能な東大寺梵鐘(口径 2.232 m)の測定値は, 1 ブラサ半と測定されるべきではないだろうか。

⑥『日本大文典』には尋(firo)の項もある。当時, ブラサが両手を左右に広げた長さとして認識されていたのであれば, この項に, 「尋はブラサと同じ長さ」という旨の記述があってもよいように思うが, そのような記述はない。これからも, 当時, ブラサは, 両手を左右に広げた長さとは認識されていなかったものと解釈される。

したがって, フロイスらが認識するブラサの単位長は, フロイスらの記述から判断すべきであり, 1 ブラサを約 1 m と考えるのが現時点では適切と考える。

§ 7. まとめ ～ 沖ノ浜の津波高

フロイスが記した『1596 年日本年報補遺』に記述されている沖ノ浜の津波高 7 ブラサは, 従来, 1 ブラサ=約 2.2 m が適用され, 波高 14～15 m と解されていた[加藤(1996), 東光(2011)]. しかしこれに用いられた松田(1987)の邦訳はラテン語版に基づくものであり, フロイスが執筆したポルトガル語版での確認が必要と考え, 臼杵市教育委員会が所蔵する史料を検証し, 原著に近い版でも 7 ブラサと記述されていることを確認した。

そして, 従来 1 ブラサ=約 2.2 m とされていた単位長について検証を行い, ブラサの単位長は地域と時代によって変化している可能性があるものの, 少なくともフロイス, アルメイダ及びヴィレラが記す京都・奈良の構造物の寸法からは 1 ブラサ=約 1 m という単位長が導かれることを示した。したがって, フロイスは沖ノ浜の津波高を約 7 m と記述していたこととなる。

しかしながら, これをもって沖ノ浜の津波高が約 7 m だったと結論付けるには早いと筆者らは考える。フロイスの記述が抽象的であることや, 高木の梢で津波高を確認したとするが, 枝が波圧でたわんだり, しぶきがかかったりして, 津波高よりも高い位置にある枝

が影響を受けた可能性なども考えられ、高さの特定は難しいからである。現在推定されている沖ノ浜や府内の津波高[平井(2013)は4~5 m, 都司・他(2012)は5.1 mと5.5 m, 図2]は、複数の史資料や現地調査に基づく値であり、信頼性の観点ではこれらの方が高いと考える。したがって、本稿における検証結果は、既往研究を否定するものではないとの扱いにとどめたい。なお、今後、歴史地震の観点から津波防災対策を検討する場合においては、少なくとも14~15 mという津波高は、歴史記録の対象に含める必要はないと考える。

謝辞とあとがき

白杵市教育委員会には『1596年日本年報補遺』ポルトガル語版(複写)を提供いただいた。そして、その翻刻及び邦訳については、大分県立芸術文化短期大学の疇谷憲洋氏にお骨折りをいただいた。また、匿名の査読者ならびに編集出版委員の西山昭仁氏から有益なご意見を頂き、本論文の改善に非常に役立ちました。ここに記して深く感謝の意を表します。

なお、今後の研究の参考となることを願って、ポルトガル語版原文の翻刻(本文に掲載したものも含めて豊後地震に関する記述のうちの前半部)を表6に掲載した。また、ポルトガル語、イタリア語、ラテン語の各言語版で、津波被災状況を把握するためのカギとなる重要な表現が、如何に記述され、如何に邦訳されているかを表7にまとめた。

対象地震:1596年豊後地震

文献

羽鳥徳太郎, 1985, 別府湾沿岸における慶長元年(1596年)豊後地震の津波調査, 地震研究所彙報, **60**, 429-438.

服部英雄, 2010, フロイス『日本史』V部 80章-----松田毅一・川崎桃太翻訳の検証, 九州大学研究成果, 14 pp. [http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/18350/Frois\(修正2011.10.17\).pdf](http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/18350/Frois(修正2011.10.17).pdf) (閲覧日:2016年10月13日)

平井義人, 2013, 古文書に見る大分の地震・津波, 大分県立先哲史料館研究紀要, **17**, 13-28.

平凡社, 2007a, 世界大百科事典, **20**(トウケートン), 574 pp.

平凡社, 2007b, 世界大百科事典, **28**(メーユウ), 618 pp.

堀口捨己, 1990, 利休の茶室(復刻版), 鹿島出版会, 711 pp.

池浩三, 1995, 鎌倉時代再建の東大寺大仏殿, 日本建築学会計画系論文集, **476**, 175-184.

池上岑夫・金七紀男・高橋都彦・富野幹雄・武田千香, 2005, 現代ポルトガル語辞典, 白水社, 1463 pp.

加藤知弘, 1996, バレテンと宗麟の時代, 石風社, 425 pp.

加藤知弘, 1997, 府内沖の浜港と「瓜生島」伝説, 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, **35**, 1-11.

金七紀男, 2010, ポルトガル史, 彩流社, 362 pp.

小泉袈裟勝, 1982, 単位の起源事典, 東京書籍, 274 pp.

黒田昇義, 1978, 春日大社建築史論, 236 pp.

京都古蹟研究会, 1950, 三十三間堂, 53 pp.

松田毅一・川崎桃太, 1977, フロイス日本史 1(豊臣秀吉篇1), 中央公論社, 397 pp.

松田毅一・川崎桃太, 1978, フロイス日本史 3(五畿内篇1), 中央公論社, 339 pp.

松田毅一, 1987, 十六・七世紀イエズス会日本報告集 第I期第2巻, 同朋舎, 326 pp.

松田毅一・川崎桃太・ろじゃ めいちん, 1987, 日本関係イエズス会原文書, 同朋舎, 200 pp.

松田毅一, 1987-1998, 十六・七世紀イエズス会日本報告集, 同朋舎, 全15巻.

松田毅一, 1998, 十六・七世紀イエズス会日本報告集 第III期第4巻, 同朋舎, 425 pp.

松崎伸一・日名子健二・平井義人, 2016, 文禄五年豊後地震における奈多宮の津波高, 歴史地震, **31**, 105-124.

三澤良文・小菅晋・浜田政則・福江正治・北原道弘・中村隆昭, 1992, 瓜生島の消失とその原因へのアプローチ, 月刊海洋, **24**, 3, 191-202.

村上直次郎, 1927, 異国叢書 耶蘇会士日本通信上巻, 駿南社, 461 pp.

村上直次郎, 1928, 異国叢書 耶蘇会士日本通信下巻, 駿南社, 523 pp.

村上直次郎, 1943, 耶蘇会の日本年報 第1輯, 拓文堂, 460 pp.

妙法院門跡, 1992, 蓮華王院三十三間堂, 85 pp.

奈良六大寺大観刊行会, 1968, 奈良六大寺大観 第10巻 東大寺二, 岩波書店, 341 pp.

奈良六大寺大観刊行会, 1970, 奈良六大寺大観 第9巻 東大寺一, 岩波書店, 363 pp.

根立研介, 2004, 東福寺の彫刻—南北朝・室町時代の遺品を中心に—, MUSEUM 東京国立博物館研究誌, **591**, 49-77.

二村隆夫, 2002, 丸善単位の辞典, 丸善, 592 pp.

岡本良知, 1970, 続戦国時代の豊後府内港其他, 大分県地方史, 第54・55号, 64-66.

大分合同新聞社, 1996, 大分合同新聞1996年12月19日付け夕刊.

大分県史料刊行会, 1962, 大分県史料(14)第三部 切支丹史料之一(イエズス会の通信), 286 pp.

㈱大分放送大分歴史事典刊行本部, 1990, 大分歴史事典, 1126 pp.

白石芳留, 1930, 東福寺誌, 東福禅寺, 1237 pp.

首藤伸夫, 1992, 津波強度と被害, 東北大学津波工学研究報告, 9, 101-136.

高市慶雄, 1932, 日本史 前編, 日本評論社, 523 pp.

東光博英, 2011, 地震と沈んだ島の伝説, GAIDAI BIBLIOTHECA(図書館報), **193**, 8.

東京大学地震研究所, 1982, 新収日本地震史料第2巻(自慶長元年至元禄十六年), 575 pp.

東京大学史料編纂所, 1990-2014, 日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集, 東京大学出版会, 原文編3巻(3冊)・訳文編3巻(5冊).

都司嘉宣・松岡祐也・行谷佑一・今井健太郎・岩瀬浩之・原信彦・今村文彦, 2012, 大分県における1596年豊後地震の津波痕跡に関する現地調査報告, 津波工学研究報告, **29**, 181-188.

筒井寛昭・梶谷亮治・坂東俊彦, 2010, 東大寺の歴史, 東京美術, 95 pp.

「瓜生島」調査会, 1977, 沈んだ島 別府湾・瓜生島の謎, 301 pp.

Wicki, José, 1976-1984, Historia de Japam, vol.1-5.

大和川清流復活ネットワーク, 2012, 河川レポート 菩提川 ♪菩提日和 ぼだいびより♪ ⑥猿沢池: http://www.yamato-river.net/report_article229.html (閲覧日:2016年10月31日)

柳谷武夫, 1963-1978, 日本史 キリシタン伝来のころ, 平凡社, 全5巻.

史料

『玉葉』(九条兼実) : 国書刊行会, 1907, 玉葉 第3, 946 pp に所収.

『日葡辞書』(イエズス会, 1603) : 土井忠生・森田武・長南実, 1980, 邦訳日葡辞書, 岩波書店, 862 pp に所収.

『日本大文典』(ロドリゲス, 1604-1608) : 土井忠生, 1955, 日本大文典, 三省堂, 859 pp に所収.

『耶蘇会のパードレ及びイルマン等が日本及び支那両国より印度及び欧州の同会員に送りたる書翰』(エボラ版, 1598)

『日本, インド, ペルーの事情についての最近の書簡』(ジョン・ヘイ, 1605)

『柴山勘兵衛記』 : 加藤知弘, 1978, 「津山氏世譜」 「柴山勘兵衛記」, 「瓜生島」調査会, 165 pp に所収.

表 1 先行研究における沖ノ浜の津波高

Table 1. Tsunami height at Okinohama in previous studies

先行研究	津波高	推定に用いた史料
「瓜生島」調査会(1977)	4.2 m	大分県史料刊行会(1962)
羽島(1985)	4.8 m	大分県史料刊行会(1962)
加藤(1996)	14～15 m	松田(1987)
東光(2011)	約14 m	松田(1987)
平井(2013)	4～5 m	松田(1987) 大分県史料刊行会(1962) 『柴山勘兵衛記』

表 2 イエズス会書簡の主な邦訳実績

Table 2. Achievement of translation into Japanese relevant to the letters written by missionaries of the Society of Jesus

著者	邦訳書名	記述年(収録年)	『1596年日本年報補遺』を収録	邦訳に用いた底本	その原語(体裁)
村上(1926)	長崎叢書『耶穌会年報 下編』 ^{※1}	1551～1570年	×	エボラ版 ^{※2} 第一編	ポルトガル語(活字本)
村上(1927)	異国叢書『耶穌会士日本通信 上巻』	1548～1569年	×	エボラ版 第一編	ポルトガル語(活字本)
村上(1928)	異国叢書『耶穌会士日本通信 下巻』	1569～1580年	×	エボラ版 第一編	ポルトガル語(活字本)
村上(1936)	続異国叢書『耶穌会士日本通信 豊後篇 上巻』	1549～1561年	×	エボラ版 第一編	ポルトガル語(活字本)
村上(1936)	続異国叢書『耶穌会士日本通信 豊後篇 下巻』	1562～1580年	×	エボラ版 第一編	ポルトガル語(活字本)
村上(1943)	『耶穌会の日本年報 第1輯』	1581～1584年	×	エボラ版 第二編	ポルトガル語(活字本)
村上(1944)	『耶穌会の日本年報 第2輯』	1585～1587年	×	エボラ版 第二編	ポルトガル語(活字本)
大分県史料刊行会(1962)	『大分県史料(14)第三部』	1579～1610年	○	東洋文庫所蔵 ^{※3} ・他	イタリヤ語(活字本)
松田・他(1987)	『日本関係イエズス会原文書』	1587, 1622, 1623年	×	京都外国語大学付属図書館所蔵	ポルトガル語(手書き本)
松田(1987-1998)	『十六・七世紀イエズス会日本報告集』(全15巻)	1548～1625年	○	ラテン語書簡集 ^{※4} ・エボラ版・他	ラテン語・ポルトガル語・他(活字本)
東京大学史料編纂所(1990-2014)	『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』	1547～1559年	×	エボラ版・他	ポルトガル語(活字本)
高市(1932)	『日本史 前編』	1549～1565年	×	Die Geschichte Japans ^{※5}	ドイツ語(活字本)
柳谷(1963-1978)	『日本史 キリシタン伝来のころ』(全5巻)	1549～1578年	×	Die Geschichte Japans	ドイツ語(活字本)
松田・川崎(1977-1980)	『フロイス日本史』(全12巻)	1549～1593年	×	アジエ図書館本 ^{※6} ・他	ポルトガル語(手書き本)
服部(2014a)	翻訳・フロイス『日本史』3部1～4章	1588年	×	Historia de Japan ^{※7}	ポルトガル語(活字本)
服部(2014b)	翻訳・フロイス『日本史』3部5～6章	1588年	×	Historia de Japan	ポルトガル語(活字本)

※1: 下地方(肥前・肥後)に係る書簡を収録。

※2: ポルトガルのエボラで1598年に印刷・出版された『耶穌会のパードレ及びビルマン等が日本及び支那両国より印度及び欧州の同会員に送りたる書翰』。

※3: 『1596年日本年報補遺』邦訳版の底本は、1599年にミラノで発刊されたイタリア語版(東洋文庫所蔵)と思われる。

※4: 『1596年日本年報補遺』邦訳版の底本は、1605年にアントワープで発刊されたジョン・ヘイによる『日本、インド、ペルーの事情についての最近の書翰』(ラテン語版)である。

※5: 1926年に発刊されたドイツ語の活字本、『日本史』第一部(1549-1578年)を活字化。

※6: 1894-1895年にリスボン西郊のアジエダ王宮図書館で見つかった写本等を底本としている。

※7: リスボン国立図書館が1976-1984年に刊行したポルトガル語の活字本。

表3 ブラサの単位長の検証
Table 3. Verification of the length of braça.

構造物		日本通信の記述 (ブラサ)	構造物の当時の寸法 (m) ※1	ブラサの単位長 (m)	記述者	
三十三間堂	長さ	130~140	118.2	0.8~0.9	フロイス	
春日大社	本殿から石灯籠までの距離	50	約50	1	アルメイダ	
東大寺	梵鐘	口径	2	2.232	1.1	〃
		周長	6	8.5 ※2	1.4	〃
		高さ	3.5	3.855	1.1	〃
	大仏の座高	14	[14.98]	1.1	〃	
	大仏殿の柱の周長	3.5	[4.7]	1.3	〃	
大仏殿の長さ	40	[86]	2.2	〃		
興福寺	猿沢池(長さ・幅)	どちらも50	[70~120]	1.4~2.4	〃	
東福寺	釋迦如来像	15	[15]	1.0	ヴィレラ	

※1: 当時のものが現存しない場合は推定値を[]で表記した。猿沢池については現在の大きさを示した。

※2: 梵鐘の周長(当時の寸法)は最も長い最下部の値を示した。

表4 松田・川崎(1977, 1978)におけるブラサに関する考察(注記)
Table 4. Verification of braça by Matsuda and Kawasaki (1977, 1978).

書名	記載箇所	注記の対象	記載内容
『日本史1』 松田・川崎(1977)	巻頭の凡例 (p14)	ブラサ	本書に出てくる長さの単位について、通常「ブラサ」は2.22 m、農村では両手を左右に拡げた長さ。「デード」は2.75 cm、だいたい指の太さ。「バルモ」は22.1 cm、だいたい、指を開いた親指から小指の先までである。しかし、フロイスが本書でこれらの語を用いる場合、どれほどを指したかは個別に検討を要するものであり、本文中の随所に注記してある。
	第1章注(58) (p120-121)	ブラサ	ブラサは往時のポルトガルにおける長さの単位で、2.2 mにあたり、農村では両手を左右に拡げた長さであるとふつうに解されている。しからば、フロイスが「日本史」において記しているブラサはどれだけの長さを指しているであろうか。「日本史」第1部61章に掲げられているアルメイダの書簡には、「日本人はヨーロッパ人のブラサ(単位)で測るのではなく、畳(8バルモ×4バルモ)を標準とする」との注目する記事がある。これによれば、在日イエズス会員は、日本の「里」を「レーグア」と表現したように、「間」を「ブラサ」として記したのではあるまいか、といちおう考えられる。しかし、それを決めるには、多くの例を挙げねばならぬし、今までのところ、吾人が検討したところでは、そのように認められる例もあり、矛盾することもある、断定できかねる。
『日本史3』 松田・川崎(1978)	第19章注(7) (p255)	三十三間堂	東向き南北66間。正確には127 m50 cm。堂の名は、内陣の柱間が三十三あることに由来する。テキストに140ブラサとあるが、それでは1ブラサが約90 cmとなり、短過ぎるようである。
	第21章注(22) (p292)	猿沢池	猿沢池。奈良八景の一。東西約100 m、南北約80 m。1ブラサを、アルメイダが言うように「畳の長さ」、すなわち1間(1.81 m)と解すれば大体一致する。
	第22章注(3) (p304)	畳によって測る	アルメイダはここでは、日本人は「間」(畳の長さ)を単位としている、と言うつもりであろう。したがって在日イエズス会員の報告書で「ブラサ」と記されている長さは、ヨーロッパにおけるブラサではなく、日本の「間」(六尺、約1.81 m)と解されよう。ただし、それで内外の記事や資料が一致するわけではない。
	第22章注(4) (p304)	大仏殿	大仏殿は29丈×17丈であるから、約48間×28間で、右の注にあるようにブラサを間とするとほぼ一致する。
	第22章注(10) (p305)	大仏	「大仏殿碑文」によると居高5丈3尺5寸(16.21 m)。したがって8.9間であり、14ブラサというのは誤解であろう。「9ブラサ」くらいというのが正しい。
第22章注(18) (p305-306)	梵鐘	この鐘(延応元年、1239年の銘がある)は永正年間(1504~1520年)に修理されたが、大きさは変わっておらず、アルメイダが掲げている数字を検討し得る。鐘の高さは1丈3尺であるから「2.15間」、同じく径は9尺1寸で、「1.5間」である。アルメイダは前者を3.5ブラサ、後者(ただし口径)を2ブラサと述べているので、ここでは間をブラサと解すると差異が生じる。けだし謄写の誤りであろう。	

記載箇所欄の“章”は松田・川崎(1977, 1978)による章立て、記載内容欄の「日本史」第1部61章はフロイスによる章立てを記している。そして、松田・川崎(1978)の第22章は、フロイスの第1部61章と同じである。

表5 イエズス会宣教師のプロフィール

Table 5. Profile of missionaries of the Society of Jesus.

氏名	生国	生年~没年	来日年	来日時の職業・肩書	1550		1600	
					来日	死亡	来日	死亡
ルイス・フロイス	ポルトガル	1532~1597	1563	司祭	▲			
ルイス・デ・アルメイダ	〃	1525?~1583	1552	商人(司祭)	▲			
ガスパル・ヴィレラ	〃	1525?~1572	1556	司祭	▲			
ジョアン・ロドリゲス	〃	1561 or 1562 ~1633	1577	少年(司祭)		▲		

()内は死亡時の肩書。▲は来日。

表 6 『1596 年日本年報補遺』ポルトガル語版における豊後地震にかかる記述(前半部)の翻刻
Table 6. Reprint of “Addendum to annual report 1596 of Japan” written in Portuguese.

Do Reino de Bungo	
<p>As cousas <i>que</i> cõ estes terremotos aconteçerãõ Em Bungo saõ taõ grandes, E taõ espantosos <i>que</i> senaõ vieraõ della diversos xpaõs que as contaraõ pareçeriaõ incrívelis esperamos <i>que</i> chegasse aqui hũ dos mais antigos xpaõs de Bungo pr nome Bras muito bom homẽ , E temente a <i>Deus</i> o que como pera que milagrosamente escapou de taõ urgente perigo como foi o en <i>que</i> se achou nos contou o que la tinha passado, E ainda agora cõ aver perto de dous mezes <i>que</i> isto tem passado diz que ainda naõ acaba de entrar ensi nẽ perder aquella assombram.nto da <i>perdiçaõ</i> de sua terra.~</p> <p>Esta hũ lugar marítimo perto de hũa legoa de Funai escala, e porto de <i>muitas</i> embarcaçoẽs que Era <i>huma</i> grande villa por nome Oqinofama, donde este bom homem se chama Bras de Oqinofama muito conhecido Em Bungo per sua casa ser hospedaria de <i>muita</i> gente de diversas partes. Diz que de noite deraõ naquella povoaçãõ de repente duas ou tres ondas sem nenhũ vento cõ tamanho estrondo E bramido, E ellas taõ encapelladas <i>que</i> se alevantaraõ mais de sete braças sobre a povoaçãõ, como depois constou pellas pontas de hũas arvores <i>mui</i> altas, E antigas <i>que</i> depois apareçerãõ. E cõ aquelle furioso impeto entrou o mar perto de <i>meia</i> legoa, ou mais pla terra adentro, E quando as hondas fizeraõ resaca nenhũa cousa deixaraõ da povoaçãõ de Oqinofama, os <i>que</i> estavaõ fora do lugar se salvaõ, mas os que acolheo aquelle tartaro infernal tudo sorveo, E levou consigo, homẽs E molheres, Meninos E Velhos, bois, E Vacas, casas, E fazendas. E ficou tudo convertido em mar profundo, como se nunqua alli ouvera povoaçãõ. Bras estava entãõ cõ sua molher, E hũ <i>filho</i> E seus criados ã sua casa, sã por nenhũa via imaginar tal cousa senaõ quando se achou de repente cõ sua casa <i>que</i> era de <i>madeira</i> ã cima das ondas, a molher e <i>filho</i> se afogaraõ, elle se salvou nadando <i>alguma</i> cousa, mas o caso he <i>que</i> naõ sabe onde, nẽ como escapou sendo lançado taõ longe, ã se as casas começando desfazer e estava Bras com sua gente <i>que</i> eraõ todos xpaõs chamando en altas vozes pollos santissimos nomes de Jesus Maria e hũa molheres gentias suas visinhas gritavaõ chamando ã vozes altas pollo nome de Amida, E por outram.te pediaõ cõ instancia a Bras que as salvasse respondiaõ o bom xpaõ como vos ei de salvar se estars chamando pelo diabo <i>que</i> vos ajude começaraõ entãõ as gentias cõ elle a chamar fortem.te per Jesus Maria, lâ lhe negociaou naqllle pagante, ainda <i>que</i> muito depressa hũs paos das casas <i>que</i> vinha diante de si, En que algũas poucas daquellas <i>que</i> chamavaõ por Jesu Maria se salvarãõ, E <i>muitos</i> gentios na Urgencia do perigo faziaõ votos E promessas de se fazerẽ xpaõs.</p> <p>Outros quatro lugares que senaõ continuando de Oqinofama polla mesma costa do mar por nome famaoqi, Tcuru, Fingi, Caxiranari, e hũ pedaço de sanganoxeqi dizem <i>que</i> da mesma maneira se soverteraõ de baixo dagoa En famaoqi dizem <i>que</i> en toda a povoaçãõ naõ avia mais que hu sõ Christaõ. Este sõ se salvou.~</p> <p>※原文は 16 世紀のポルトガル語であり、イタリック文字は原文における省略文字を補ったもの(例:<i>que</i> の原文は q の上に省略を表す[~]が付いたもの)</p>	

表 7 豊後地震津波に関する表記の比較 各国語版とその邦訳

Table 7. Comparison of the term about the Bungo earthquake tsunami between Portuguese, Italian, Latin and Japanese.

各国語版とその邦訳	人名/プラス	府内と沖ノ浜の距離	津波高	津波高の確認法	津波の浸水域	原本に関する備考/邦訳の出典	
ポルトガル語版	原本	Bras	hua legoa	sete braças	pontas de huas arvores	meia legoa	・複写版(手書き) ・イエズス会文書館所蔵 ・臼杵市教育委員会マイクロ所蔵
	(邦訳)	(プラス)	(1レグア)	(7ブラサ)	(木々の梢から)	(半レグア)	・本研究
イタリア語版	原本	Biagio	tre miglia	sette braccia	cime di certi alberi	un miglio e mezzo opiu	・1599年ミラノ版(活字本) ・例えば、筑波大学所蔵
	(邦訳)	(ピアジオ)	(三哩)	(7ブラッチョ)	(古木の頂から)	(一哩も一哩半以上も)	・『大分県史料(14)第3部』
ラテン語版	原本	Blasius	tribus millibus	septem cubitis	arborum culminibus	millire unum&medium	・1605年アントワープ版(活字本) ・例えば、筑波大学所蔵
	(邦訳)	(プラス)	(三千歩)	(7ブラサ)	(古木の頂上によつて)	(千五百歩)	・『十六・七世紀イエズス会日本報告集 第 I 期第2巻』[松田(1987)]



図1 沖ノ浜と府内の位置
Fig.1. Location of Okinohama and Funai.

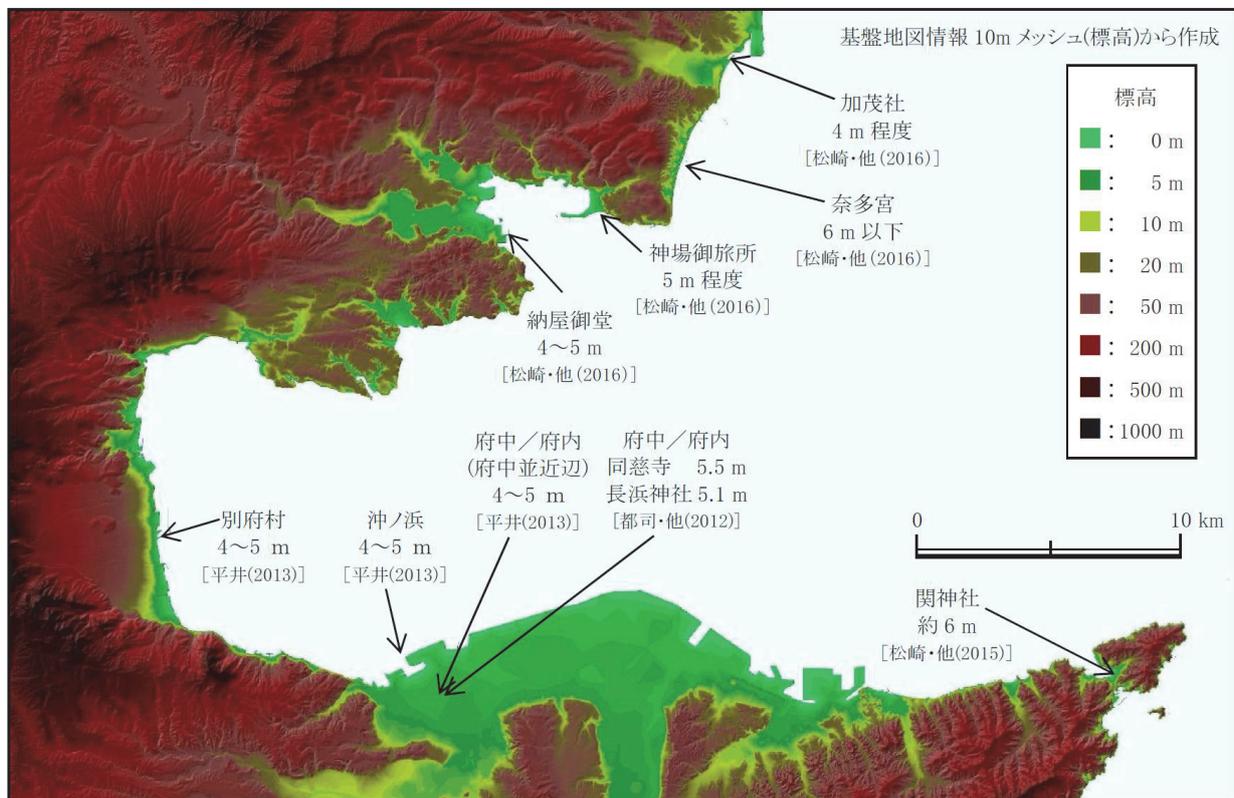


図2 豊後地震における別府湾沿岸の津波高(既往研究)
Fig.2. Estimated tsunami height of Bungo earthquake around Beppu bay in previous studies.

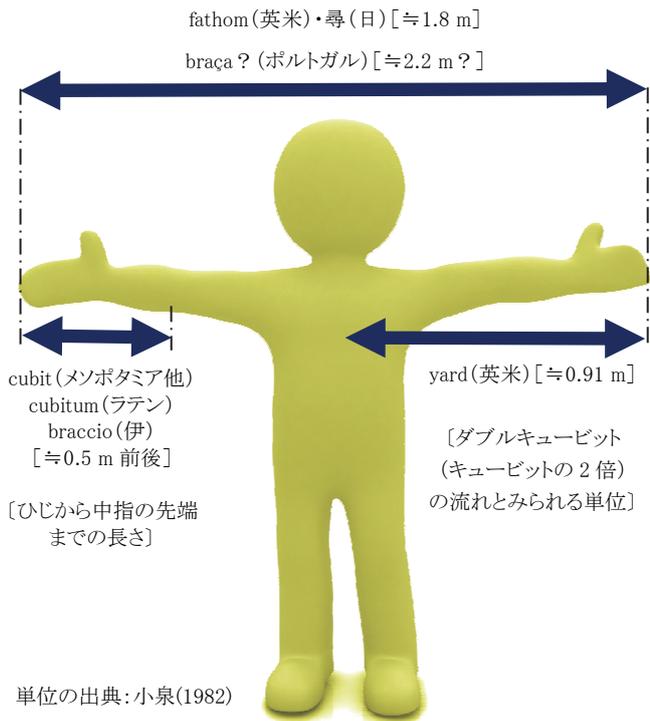


図3 いろいろな長さの単位(身体尺)
Fig.3. Some kinds of length unit.



図4 春日大社の石灯籠
(2016年1月16日撮影)
Fig.4. Stone lanterns of Kasuga-taisha.

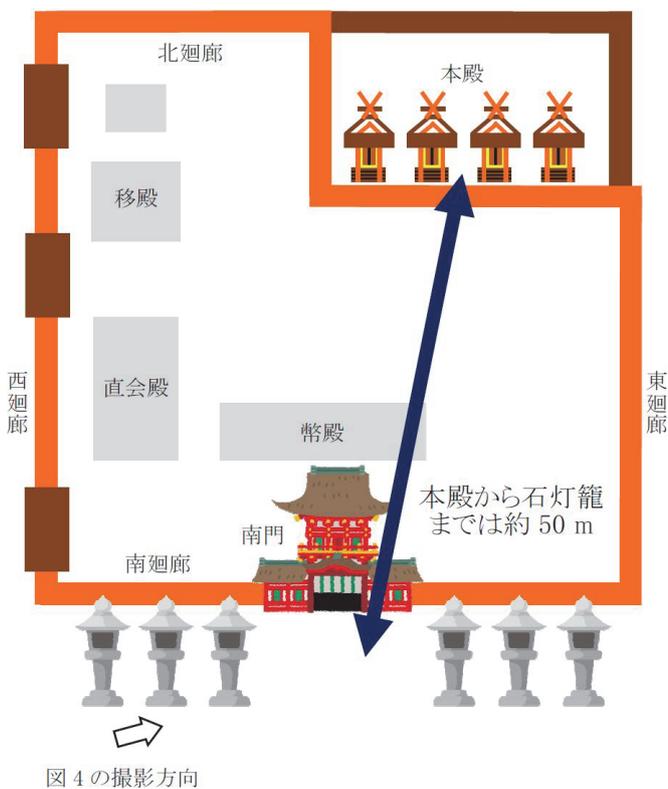


図5 春日大社の本殿周辺
Fig.5. Layout of Kasuga-taisha.



図6 東大寺 梵鐘(2016年10月9日撮影)
Fig.6. Temple bell of Todai-ji.